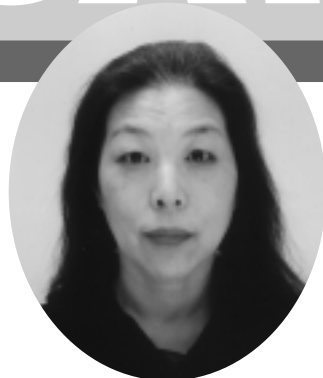


ART ESSAY

アート★エッセイ

今、想うこと



遠藤 彰子
(武蔵野美術大学教授・画家)

私たち日本人が「美しい」という言葉を使い、その意味になったのは室町時代からだそうで、奈良時代には「くはし」と言い、詳しいとか香しいのように細かい意味が、美しいのかわりに使われていたようだ。平安の頃は「きよし」清いという言葉が美しいの意味に当たるそうだ。これは、私達の先人達が細かく、汚れない様を好んだということなのだろう。

そんな美に対する意識が、明治になり西洋文化の洪水に押しやられ、混沌とした状態となった。美を追求するものが、新しい文化に触発され、新しい美の基準を追い求めていくのは当然の流れだと言えるのだが、それが現在ではあまりにも多様になりすぎたのではないかと考えさせられる。

私は教育現場でも根源的な美しさを再認識する必要があるのではないかと考えている。教育とは過去の財産を現在に伝える事が重要であり、しっかりと

した基礎を学ぶべきところだと思うのだ。学生達には過去の財産をしっかりと学んだ上で、イメージを広げ、新しい発見をして欲しいと願っている。

また、描きたいものを描くための技術はいつの時代にも必要である。現在、美術は絵画だけではなく、映像、ファッション、イラスト、漫画等、様々な分野に広がりを見せている。どのような分野でも、人に自分の発想やイメージを伝えるうえで基礎となるのは、描く力にあるのだ。四角い平面の中で色彩の組み合わせや構図によって変化する印象の違いを模索することは、ものづくりの基本となるものだと思う。

私も長く絵を描いてきたが、造形美を基本に、四季折々の美しさを取り入れながら、明日に向かって生きていく人間を力強く描いていきたい。そして、それが少しでも伝わることを願いつつ、日々絵筆を握っている。
(えんどう あきこ)



「見しこと」
333×498cm
芸術選奨
文部科学大臣賞受賞

特集 授業の極意

第 3 回

デザイン・工作・工芸の巻

ライブハウス591

授業はくだけた言い方をすれば“ライブ”であり、教室はいわば“ライブハウス”である。生演奏と観客の一体感で盛り上がっていく。大まかな筋書きはあっても、アドリブもありアクシデントもしょっちゅう。ちょっとしたドラマが展開する。お客は非日常を楽しみに来る。ただし、つまらなければ明日から客は来ない。CDを聴いているのではないのだから。

“生”で勝負するノウハウは、聞きかじりなんかは役に立たない。ましてマニュアルなんぞありはしない。“生”とは身をもって知っての上でということ。

このライブハウスでの生演奏を、新しくて発刺としたものにしていくにはどうしたらいいのだろう。観客とつくり上げていくにはどんな工夫がいるだろうか。その極意をつかむには、

数多く人のライブを見に行くこと。

数多くレッスンすること。

数多くライブに立つこと。

このくり返しがダイジだろう。

工作の指導＝特定の生活用具や玩具をつくらせること、デザイン＝ポスター、といった題材観、教材観のシバリからいまだに解放されていない。子どもたちがもつデザインや工作に対する資質や能力を遺憾なく発揮させるためには、先生の無意識に働く行為の中に、心の自由を失わないエネルギーが必要なのだろう。

音楽は聴くものじゃない。味わうもの。

図工だってつくりだす喜びを味わわせる。っていつてるじゃないか。

コロコロ大作戦(2年生)

「動かしながら、たしかめながら」が授業の極意

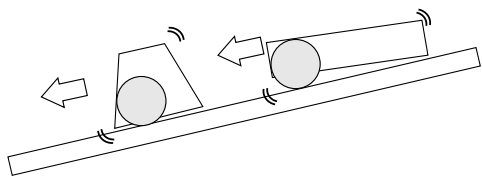
千葉県市川市立中山小学校 北川 智久

1. 授業のねらいをはっきりさせる

ねらいをどこに置くかによって、授業づくりはずいぶんと変わります。すなわち、授業の極意というものも、「展覧会等に向けての作品づくり」がねらいか、「子どもの工夫を引き出すこと」がねらいか、などによって異なります。どちらも大切です。教師があやふやな気持ちで二兎を追わないことが、題材設定時の極意です。

今回は、「子どもの工夫を引き出すこと」を主なねらいとした授業展開を提案します。

坂道をおもりの働きで下のおもちゃづくり



2. 仕組みが先か？ 装飾が先か？

動くおもちゃづくりでは、仕組みの動きから想像を膨らませて作品に仕上げることが楽しいのです。でも、仕組みの段階ではよく動いたのに、飾りを付けたら動きが悪くなってしまうことがあります。そこを調整する苦労も大切な学びです。

装飾を先にして仕組みを後付けにする授業展開もあります。こちらは「作品づくり」が主であり、今回の内容とはねらいが異なります。

3. 興味・関心を引き出す導入

「子どもの工夫を引き出す」ということは、子どもたちに試行錯誤の過程を楽しませるということです。手順に沿ってつくればよいという一本道で

はない分、興味・関心という動機付けが大切です。最初の提案は、仕組みについてです。

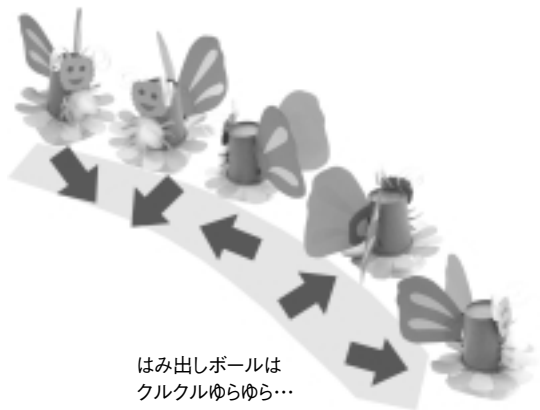


「はみ出しボール」

「でこぼこボール」

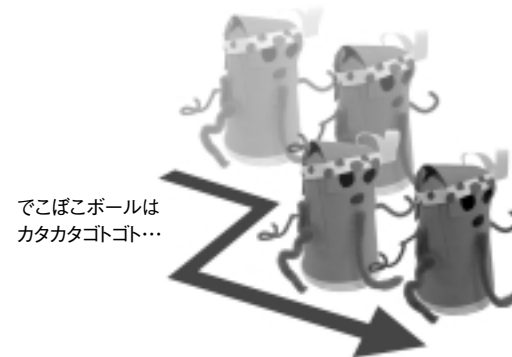
カップや筒の中にエンジン(ビー玉等のおもり)を入れて斜面を走らせるおもちゃをつくるのが本題材です。導入では大小いくつかのビー玉、ゴム玉、ゴルフボールなどを用意しておき、動きの様子を見せることから始めます。

エンジンとなるビー玉の大小でスピードが変わることは、子どもたちにもすぐわかります。「はみ出しボール」と命名した仕組みは、カップの深さよりボールがはみ出している仕組みで、不思議とクルクル回りながら斜面をすべり降ります。



はみ出しボールはクルクルゆらゆら…

「でこぼこボール」は、大きめのゴム玉に、丸い頭のピンを4つほど刺したものです。カタコトと不規則な動きをします。



でこぼこボールはカタカタゴトゴト…

これらの仕組みを、ぜひ透明なプラスチックカップの中にエンジンを入れた状態でも見せてあげてください。

「あっ、ボールの動きが見える。」

「でこぼこボールは、ボールが考えながら行く方向を決めてみたい。」

子どもたちの目は真剣です。

「ヨタヨタして、酔っ払った人みたいね。」

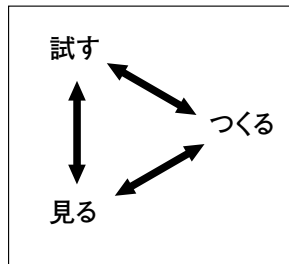
など、見立て遊びも始まります。

シンプルな素材(カップ類、何種類かの玉、丸い頭のピン)と斜面を提供して、「どんな動きが生まれるか実験してごらん」と言うだけで子どもたちの多様な試行(思考)活動が始まります。もう「工夫したいスイッチ」が入っているので、どんどん工夫は広がります。

この、導入と試行活動だけで45分間は必要です。最後に、次週の図工の時間に向けての材料集めの計画を立てます。

4. 学び合う場をつくる

次の週の図工の時間になりました。いつまでも仕組みを試しているだけでは活動は進みません。反対に、装飾が完成するまでイスに座り続けているだけでもよくありません。



試す→つくる→見る→試す→つくる→見る…、をくり返すことで学びが深まるのです。

みんなで見合うということは、

- ①友だちの工夫が見えて参考になる。
 - ②自分の工夫を友だちに認められることで更なる工夫の意欲が生じる。
- など、様々なよさにつながります。



5. 子どもの輝きを保護者に伝える

試したり、つくったりを繰り返した末に、作品がボロボロになってしまうことがあります。そのような作品を飾ったり家に持ち帰ったりしても、なかなか評価をしてもらえません。しかし、今回のような活動で大事なものは、製作過程の試行錯誤を楽しむ子どもたちの目の輝きそのものなのです。から、「結果としての作品で評価」という視点も変えなければなりません。

完成作品を写真に撮って学級掲示や評価に生かす先生はよく見かけますが、「製作過程の子どもたちの様子」をデジタルカメラやビデオで撮影する先生はあまり見かけません。今回のように「子どもの工夫を引き出すこと」や「試行錯誤の中での学び」を評価したい場合は、ぜひ「製作過程の子どもたちの様子」を保護者会などで家庭に伝えていただきたいものです。

「家に持ち帰った作品は普通だと思ったけど、授業中の表情は家で見たことのないような輝いた表情に見えました。」

「図工って大切な学習なんですね。」

との感想を得ることもしばしば。これぞ、図工のよさを家庭に伝える極意。(きたがわ ともひさ)

デザイン・工作・工芸指導の極意

「糸のこドライブ(5・6年上)」を例にして

福島県柳津町立柳津小学校 平塚 学

電動糸のこぎりは他校から借りる

「糸のこドライブ」の実践では、必ずといってよいほど、「電動糸のこぎりの台数が足りない」という話を耳にする。簡単に解決する方法がある。隣の学校から借りればよいのである。同じ市町村の財産を活用しない手はない。電動糸のこぎりを使うのは、「糸のこドライブ」と6年の「12歳の力で」ぐらいである。実施時期をずらせば、他の学



校では使っていないのである。私は、町内の小学校と中学校から借りて、2人に1台を用意した。待ち時間がなくなり、とても効率的に切ることができた。ただし、2人に1台というところがポイントである。2人だと自然に互いに学び合い、協力する姿が生まれるのである。

道具の使い方は確実に指導すること

図工では、電動糸のこぎりや両刃のこぎりきりなどの道具を使用するが、道具の使い方は確実に指導することが大切である。始めに指導したとしても、全員に十分伝わることはない。私は、演示の際に指導することはもちろん、全ての電動糸のこぎりの後ろの壁に使用方法を掲示し、それで確認しながら活動できるようにした。さらに、巡視しながら、まちがった方法で使用した児童を見つけた場合は個別に指導するようにしている。

糸のこドライブをさせる秘伝

「糸のこドライブ」で大切なことは電動糸のこぎりで形を意識させることなく切らせることである。鉛筆で線をかいてその線に沿って切らせることは御法度。思い通りに切ることができず子どもたちに失敗したという気持ちをもたせてしまう。では、どうすればよいか。題材名の通りに、ドライブに出かけるのである。子どもたちを電動糸のこぎりの周りに集め、「先生が、これから糸のこぎりを使って、ドライブに出かけるよ。ブンブンブン。まずは直線道路。あっ、峠道だ。キキキ、キキキ、続いてヘアピンカーブだ。」などと言いながら、板を動かしてどんどん切っていく。その演示を見せた後、「じゃあ、みんなも思い思いの道路をドライブしてこよう。」と投げかける。すると、

形を気にせず、楽しく思い思いに電動糸のこぎりを使って、いろいろな形を切っていく。ドライブが終わるころにはとてもおもしろい形のパーツが出来上がっているのである。

いらない材料は共有化

無意図的に切った形であるため、組み合わせていくとどうしてもいらないパーツが出てくる。そんなパーツは「宝物コーナー」へ。ここにあるパーツは共有財産となり、誰でも自由に使ってよい。すると、ほしい材料が見つかるとともに、無駄もなくなり、とても効果的である。ただし、自分が切った材料よりももらったパーツの方が多くなることもあるため、「宝物コーナー」からももらえるパーツの数は制限を加えた方がよい。

木工用接着剤は接着法を確実に伝える

木工の実践を見て気になるのが、木工用接着剤の使用法を子どもはもちろん、先生方も知らないことが多いということである。接着剤は多くつければつけるほど着くと思っているのである。(たくさんつけるとかえって着かないし、仕上がりも汚くなってしまう。)木工用接着剤では、まず紙ヤスリを使って接着面を整えることが大切である。続いて、両方の接着面に薄く塗り、1分ほど(メーカーによると5分以上)乾かしてから、圧着するとよい。私は、「接着剤を両面に塗り、接着する木を両手に持って振りながら60数えたら接着する。」と指導している。ただし、木口にはやや多めに接着剤を塗ること。その後、クランプやテープなどで固定すると確実である。

着色はアクリル絵の具を使って

水彩絵の具で着色し、その上からニス塗ると、最低でも3時間、下手すると4時間ほどかかってしまう。しかし、乾くと耐水性となるアクリル絵の具を使用すれば、2時間ででき、仕上がりもニスを塗ったのと変わらない。さらに、アクリル絵の具は乾くと重ね塗りができ、模様を工夫することが容易である。



鑑賞会は子どもたちが置きたい場所に置いて

「糸のこドライブ」では、つり下げのものや壁に掛けるもの、机に置くものなど多岐にわたる作品ができる。そこで鑑賞会では、それぞれの子どもが置きたい場所に置いて鑑賞できるようにすることが大切である。私は、教室にワイヤーを張り、S字フックをつけ、つり下げたい子はそこに下り、壁に掛けたい子は掲示板へ、置きたい子は机に置いて鑑賞し合った。

材料置き場を作ろう

工作の時に必要なのが材料である。自分で使いたいものは個人で用意することが大切である。しかし、突然思いついた時や予定が変わった時、ほしい材料が見つかる場所があったら、子どもたちにとって材料置き場は宝物置き場となるに違いない。少子化でどの学校も空き教室があるはずである。その1つを、材料置き場へと変身させるのである。この材料は、図工はもちろん、生活科でも、理科でも使ってよい。材料の種類ごとに仕分けし、余った材料を置いたり、使ったら補充するようにしていくのである。(ひらつか まなぶ)



「平面構成」の制作から生活力を身につける

北海道千歳市立向陽台中学校 宮武 輝久

生徒へ日頃言っていることは、「自分の頭で考える」「人に伝えるために作品をつくる」です。結果としての作品は、本人が努力した『よさ』が表れているものだが、できるだけ制作過程の軌跡がその表現に表れているものを大事にして評価したい。次に、授業を通じて大事な姿勢は、「大切に」（造語になるかもしれない）、「集中力」、「追求」だと言っている。「大切に」は、ものごとを大切にやる態度で制作の基礎と言えるものです。「集中力」は、中学生としての必要な素養。家庭持ち帰りは極力させないで、授業で作品を完成させる。「追求」は、いろいろな能力を発揮するには粘り強く追求する姿勢が必要になる。

デザイン学習はいろいろな能力を育てる事が出来る。中でも美術の文法とも言える「平面構成」は、表現や鑑賞の基本になるので省く事は出来ないと思う。以下は、私が実践指導しているデザイン学習時のポイントをかいつまんで紹介したい。

ポイント語呂合わせ「アイウエ語録」

例えば、サ 三変化 シ 白先 ス 水分調整 セ 清色先 ソ ぞうきん必携。

デザインの特に彩色の際に必要な基本技能で、良い結果を生む秘訣を、サシスセソに当てはめた。ほとんどこちらの都合で強引に当てはめている。三変化は着色で、例えば同じ赤を使うにしても3つの変化(明暗や類似)以上を考える事。白先とは、混色の際に2色のうちどちらを先にするのかの基本。どちらか明るい方を先に筆につける。水分調整は、均一な色面を作るコツ。清色先は、着色の順序。ぞうきん必携は、いろいろな部分でぞうきんを利用する。腕を上げるにはぞうきんの使い方を上手く使うこと。その他いろいろな事を言いたいが、

限られた制作時間の中で説明しているともったいないのでこうしてみた。事前に模造紙等を書いて掲示する。指導する側も押さえやすく、生徒もいろいろな事を言われるより、やろうとする作業がはっきりする。あとは個別指導で補足する。

「目測」

1年のデザイン学習導入場面で、造形感覚を訓練する一つに「目測」の学習を取り入れている。ある長さのまっすぐな線を引くとき、定規を使わず自分の目の感覚をたよりに引いてみる。スケッチやデッサンは基本的にそうしているが、その他の、例えばある枠を作るとき、たいてい定規を使うが、それをあえてフリーハンドで引かせる。1、2、3cmの水平線を引きなさい。と言ってフリーハンドで引かせると、最初は戸惑いをみせながらも思い思いに工夫しておそろおそろ引いている。まっすぐにならなければ、まっすぐになるよう何度でも引き直す。引いた後どれだけ近い値になっているか測ってみる。すると意外にその長さに近い線を引く。初めてでも、クラスの半数の生徒は指定した長さのプラスマイナス1cmの範囲でまっすぐな線を引いている。とても簡単な学習訓練だが、近い値を予想する事から始まって、注意深く線を引く緊張感と定規で確かめた値が近かった驚きがある。指定とかけ離れたものでも、今後繰り返す事によって、予定した長さできれいな線を引く事ができるようになる。そのような基本練習を生かして、ケント紙にこれから作品にする画面(枠)を作成する。

1年「自然物を生かした平面構成」

自然物を選び単純化等工夫して形を直し、いよ



1年生の作品

いよ作品にしていくが、前述のように目測で枠を作っておいて、アイデアを練る。完成のイメージができた所で、最初に背景から着色する。これは混色と塗りの練習をかねている。条件として、作った色を使わせる。よく黒を選んで塗る生徒がいるが、このあと形を手描きするので見えなくなるし、黒を他の色で作るのが難しいのか、選ぶ生徒は一人もいなかった。また、結果として生徒同士同じ緑を塗っても微妙に違う緑を表すようになった。表現のレベルを高める事より基礎的な学習訓練という意味合いが強い。いままで私は平面構成の作品を見るたびに、無機質でオートマチックな雰囲気があって、評価観点以上に鑑賞に堪える作品はなかったのだが、このようにする事で何か人間的な情感とか「味」が出たような気がしている。

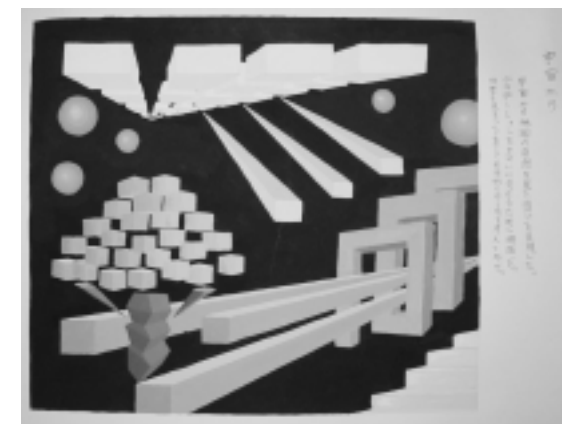
3年「立体感のある構成」

2年で「美の秩序」、や、その他「アイヌ文様」等学習させた後、3年で「立体感のある平面構成」を制作させる。3年の授業は、基本的に細部にわたる具体的な説明を省略する。いわゆる手取り足取りといういぬいな指導をほとんどしていない。突き放した姿勢で臨むので生徒は考え悩む。ねらいにそった表現になるようあれこれと考えあぐねて制作を進める。その途中の考えがどう変化しているのか、とか、どんな発見をしているのかに注目したい。完成後のまとめで、この学習(制作)を通して考えたことや発見したことを記入させた。すると以下のような記述が見られた。

やりすぎたと思うくらいやってみたらすごくうまくいった。色の使い方により何を伝えたいかをはっきりさせないと、なかなかイメージが伝わらない。一つのものから連結して想像すること。一つの発想からどんどん大きくイメージがふくらんでいく、…断片的に思いついた事を試しに描いたり消したりする間に一つの作品になる。白を加えて薄くしたほうがムラになりにくい。オレンジが1カ所入っただけで画面が一気に明るくなる。何かを強調させたいとき、周りを変化させていけばそれが変化すること。暗さの度合いによって距離に変化が出てくる。色をたくさん使って塗ることが必ずよいとは限らないということ。立体の奥の幅を大きくしてしまうと美しく見えない。黒白の使い方が一番勉強になった。まっすぐ線を引くときは腕ごと動かす。発見が多かったのは、下描きの時より色塗りの時、こってり感と透明感…。こってりしたところの上から透明の色を塗るとどんな感じになるのだろう。「陰陽」2つは表裏一体だ。陽の中に陰を入れたり、少しだけ反対のものを入れると引き出したいものが引き立つ。あえて不自然にした方が、実際にはないような感じが出せたと思う。

作品制作の隠れたねらいは、試行錯誤する過程から、ある考えが発見できる事。できがよい作品の記憶も当然残るが、それよりも制作を通じて得られた教訓、考えはたとえ失敗した作品であっても記憶にしっかり残るものだ。その積み重ねは、やがて美術を愛好する心情へ繋がると思う。

(みやたけ てるひさ)



3年生の作品

生徒の内側から「造形動機」を引き出す授業の極意

～紙の美しさを引き出す「抽象的な構成」(第3学年)～

福岡県大野城市立御陵中学校 友野 恵美子

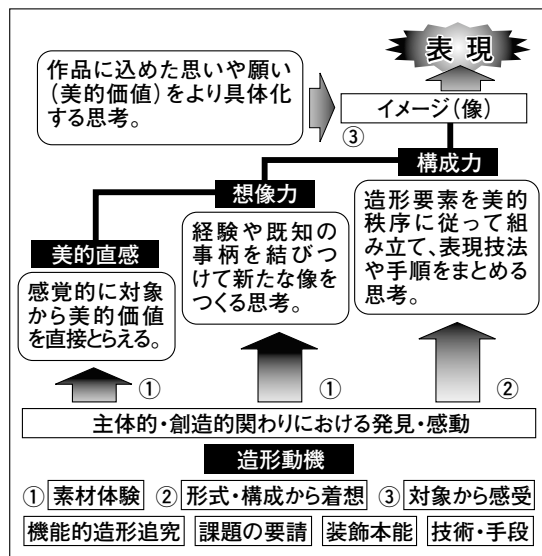
1. はじめに

「美しいこと・美」とは、快いこと、「感動」を人に与えるもので、心を生き生きとさせ「創造」に向かわせる力をもっています。私は、この力を生徒の主体的な対象との関わりでの原動力として、学習の各段階でどのように動機付けしていけばよいかを考えています。

2. 造形の動機付け—「美」を見出す

紙による「抽象的な構成」では、以下に述べる4つの「美」があります。①紙のもつ可能性や特性である「素材の美」、②白一色の画用紙の立体が創り出す両極「光と影の美」、③モチーフと空間の秩序である「構成の美」、④抽象的構成から訴える作品に込めた思いや願いなど表現意図を伝える「創造性の美」です。

3. 授業設計の各段階における造形の動機付け



この作品制作は紙のもつよさと光と影の美を直接とらえさせることで造形動機が高まると考え、全過程においてアイデアスケッチを一切おこなわず、実物操作によって進めました。

(1) 課題把握の段階—素材体験からの造形動機

まず、抽象的な構成の単位となるユニットの形づくりの可能性に着目させました。

生徒は思い思いに紙を折り曲げたり、丸めたり、ひねったり、重ねたりし始めました。ここで生徒自身も思いがけない形を発見したり、基本的な変形に工夫を加えたりして自分なりの「美」を次々に創出していました。

教師が想定した発想の幅を十分に超えた学習活動になりました。

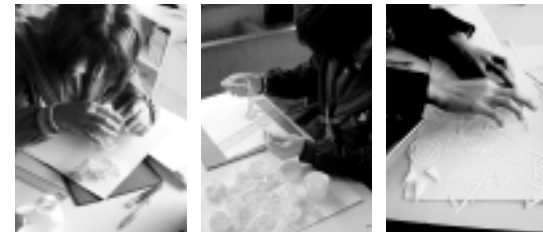
生徒は、「とりあえずひねったりねじったりして、日常生活で目にする形を思い浮かべて独自の形を発想していった」、「思いついた形をそのまま表現するのではなく、変形させていった」と形づくりのポイントを述べていました。



ユニットづくり—紙の変形
(ア) 切り抜く、(イ) 折る、(ウ) 重ねる、(エ) 曲げる、(オ) 巻く、(カ) ひねる、(キ) 差し込む、等

(2) 課題追求の段階—形式・構成からの造形動機

ここでは光と影を秩序づける活動をしました。ユニットを画用紙上に配置し、動かしながら、美



制作の様子

しいと感じる配置や構成を見出させました。また、制作の途中で相互評価活動をおこない、個々の作品のよさから、シンメトリーやリピテーションやリズムなど、整然とした美や秩序、リズム、バランス、動きなどの躍動感の美を生徒は見出すことができました。「粗密のバランスを利用して、ユニットの大きさを変えた作品は、見てもあきないよさがありました」、「空間と密度がとても重要で、少し配置を変えるとイメージが変わってしまうことがわかった」などの感想から、生徒が自分なりに構成の美を見出し、達成感をもつことができたことが窺えます。

(3) 課題解決の段階—対象からの造形動機

形の面白さや美しさをもとに構成し配置されたものから、心に浮かんでくるメッセージや思いを具体化していくために、自分の作品との対話をおこないます。

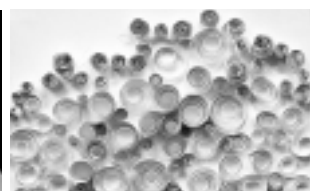
この段階で、何が言いたいのかよくまとまらない、何も浮かばない生徒も中にはいます。そういった生徒には“訴えるものが弱い作品は何か足りない”のだからユニットやモチーフをさらに付け加え、再構成をするようにアドバイスします。こうしたプロセスを経て生徒は、粗密のバランスの美を発見したり、動きが出てきて動勢の美を見

【生徒の感想より】

- 色がなくても光の当たり具合で、作品の感じが変化するのがとても美しいと思いました。
- 色を使わなくても、紙だけでいろいろな表現ができたことに驚きました。
- 誰の作品とも重ならない、みんな違った美しさがあり、自分の個性を生かせる作品だと思います。
- いろんな形やアイデアを考え出すことによって、作品がより美しくなると思いました。



「大波」



「宇宙の風」



「テーマパーク」



「バラ園」

出したりしました。また、作品との対話をしていくうちにイメージが広がり「宇宙の風」と題して、構成を調整する生徒もいました。

しかし、逆にユニットの種類やモチーフが多すぎてまとまりがなくなってしまった生徒には、課題把握の段階にもどってモチーフやユニットの美しさをとらえなおさせます。そのことから「簡潔化」・「総合化」・「組み合わせ」のデザインの基本構造をつかませました。

(4) 充実発展の段階—課題からの造形動機

ここでは最初から表現意図(このようなイメージを表したいという課題意識)を設定して、形づくりや構成をおこないました。

「バラ園」のイメージをした生徒は、波形に切るハサミを意図的に用いて、渦巻きを何種類もつくりバラの茂みを思わせる構成をしました。また、「大波」をイメージした生徒は、幅の広い渦巻きを緩く巻いて、台紙に断面を貼り付けず、立体的に高さができるように積み上げていきました。

4. おわりに

「像を閉じ込めている大理石の中から、その像を解放するために彫り起こす」とは、ミケランジェロの言葉ですが、大理石の表面に内側から押し上げてくる像のイメージを彫り起こすこと、すなわち自己開放ということを行っています。生徒の作品づくりの中にもこの言葉が生きていると同時に、私たち美術科教師は、生徒の内側にある“美を求め、追求していく心”を引き出し、輝かせることこそが最も大切なことだと感じます。

(ともの えみこ)

子どもの椅子

FROM

神奈川県横浜市立東希望が丘小学校
安藤 美穂



大きなロール紙に版で、「不思議な生き物」を表すことを行ったときのこと。紙版画との出会いによって、子どもたちがどのように刺激され、表現に表し、変容していくかとても楽しみだった。

T君は、自己表出するまでに時間がかかるときがあり、自分が困っていることも言い出せな



いことがあった。しかし、今回版を作り始めたとき、ほかの子どもたちが画用紙を前に試行錯誤している中、思いのままにはさみを動かさし、つぎつぎに紙片を組み合わせ、みるみるうちに机の大きさをくらの「不思議な生き物」を作っていくT君の姿があった。

そっと見守っていると、小さなつぶやきすら聞こえてくる。T君の中では、作っている生き物が元気よく動き回っていることが分かる。

「大きく作れたね。みんなに見せてもいいかな？」

と声をかけたとき、ハッと手を止めたT君。自分の世界に没頭していたのだろう。困ったようにうなずきながら、

「ほら、T君の生き物はこんなに大きくなってきたよ。」

とみんなに見せている私を見上げていた。生き生きとしたT君の姿に、他の子たちが触発されないわけがない。形を描かずに、切り取った紙片を組み合わせることに戸惑っていた子たちも自

分らしい生き物を見つけ出していった。

この題材の中で自分なりの自己表現に満足ができたT君は、このころを境に、発言をしたり、友だちに話しかけたりすることが多くなっていった。私にとっても、今までに見えていなかったT君との新たな出会いであった。

大きなロール紙に版をいくつも刷っていく表し方にした今回の題材。多少の「失敗」も一つの表現として考えを転換しやすく、いろいろなことを試した。



その中の一つが、子どもたちの名づけた「分身の術」。たまたま、刷り終わった版を、また、紙の上に乗せてしまった時、「あれ？写った。分身の術！」と言ったことがきっかけだった。インクが版に残っているので少し薄くなる場所に子どもたちは魅力を感じていくのであった。友だちと一緒に何回もやってみることで、不思議な表現と出会っている子どもたちもいた。薄い印刷＝失敗と考えず、「影みたい」という発想に新たな表現と出会うヒントがあった。

友だちと一緒に「せーの」と版を並べて置き、仲良しである思いを版に乗せ表現する心温まる姿にも出会った。



大きなロール紙に一人一人が作った版を刷っていくことで、様々なストーリーが重なり合い、大きな作品となっていく。その過程で、子どもたちが表現する喜びに出会うことを願っていた。しかし、そこに、子どもたち一人一人の個性と成長、子どもたちの姿から生まれたストーリーが折り込まれていることに気付いた時、私自身が題材開発をしていく喜びや子どもたちの変容を見とっていく喜びと出会っていたのだった。

(あんどろ みほ)

図工室

美術室

昨年度、1年生を担当していたとき、図工を研修する機会をいただいた。専門でもなく、取り立てて研修したことのない私にとって、何をどう進めていけばいいのかかわからず、途方にくれてしまった。

それまでの私は、図工と言えば、子どもの時から苦手意識の固まりで、教職に就いてからもどう教えていいのか、作品をどう鑑賞したらいいのか、すべてが課題だった。すばらしい作品に出会ったら、指導法を聞きに行き、自分の中に取り入れる。自分の技術を高める、いい作品を作る、そればかりを求めていた気がする。苦手な子にしてみたら、苦しい図工だったかもしれない。

造形遊びへの挑戦

良知 香苗(静岡県焼津市立焼津西小学校)

だが今回、造形遊びを研修したことで、私のそれまでの図工への思いは大きく変わった。造形遊びについては、正直、ねらいがよくわからず遠ざけていた。しかし、新聞紙や段ボールなど様々な素材に思いのままに関わり、形を変えていく造形活動を組むことによって、それまで見たことがなかったような、生き生きと自ら動き出す子どもたちの姿を見ることができたのである。新聞紙をちぎる、丸める、つなげる…段ボールを積む、組み立てる…。素材に関わり、単純に見える造形活動が続ける中

で、何かに見立てて遊び、さらに活動を広げていく。そこには、作らなければならないものなどないし、出来映えを評価されない。子どもたちは安心して、時には友達と関わりながら、素材で思い切り遊ぶ。心が開放されると、発想も柔軟になり豊かになる。この活動を通して、どの子も表現する楽しさを味わうことができたのだ。とかく材料集めや環境作りの難しさで、後回しにされがちな造形遊びであるが、その価値は大きい。

(らち かなえ)

美術はなくなってもよいか

大倉 匡仁(愛媛大学教育学部附属中学校)

勤務校である附属中学校は、私の母校だ。前任の先生は恩師で、引き継いだ研究室には私の中学校時代の作品が飾られてあった。なかなか粋な作品の返し方？であるが、みなさんはきちんと児童生徒に作品を返却しているだろうか…。

本校には、「青葉写生会」というのがある。1年生は県文化財である本校の講堂、2年生は小説「坊っちゃん」で有名な道後温泉周辺、3年生は堀之内周辺。青葉の美しい5月の連休前に、全校で写生する。風薫り光輝く気持ちよい場所での写生は格別。

生徒は熱心に筆を動かす。提出は、連休明けという何ともよくできた計画で、私が子どもの時からずっと続いている。

運動会には、各学級で装飾旗という畳4畳ほどの応援旗をつくる。夏休み中からアイデアを練り、例の講堂にブルーシートを敷き詰め、クラス総動員で制作する。クラスマッチ形式で競うため、どの学級も意欲的に取り組む。不公平になってはいけないので美術教師は一切口出しできない。そんな中、授業で学習したことが生かされている旗を目にしたときには、他の学級

であってもとてもうれしい。

学習成果発表会では、有志が市内の小学校に向けてポスターを制作し、6年生に招待状を添える。伝えたい相手を思い浮かべ、自分の力を精一杯発揮してできあがるポスターは、心がこもっていてすばらしい。

本校は合唱も盛んで、新入生を歌で迎え、卒業生は歌を歌い学舎を巣立っていく。芸術は、学校生活の一部であり、ゆとりや潤い、そして活力をもたらす。美術もその一翼をしっかりと担っている。これらの土台は、普段の授業であり、生徒たちのひたむきな取組があつてのものだ。本校から、美術はなくせない。

(おおくら ただひと)

マイ・イーハトーブ・ストーリー ～宮沢賢治の世界へようこそ～

栃木県大田原市立黒羽小学校 仲西 伸人

1. はじめに

物語を絵に表すことは、よくある授業風景である。しかし、その物語を立体化したらどのようなのだろうか。このような発想から本題材は生まれたのである。

本題材では、宮沢賢治の作品の中から自分の好きな物語を選び、立体化するという創作活動である。そのためには、前時までに学習した表現方法を生かしたり、材料から発想を広げ、新たな表現方法を工夫したりして、空間構成を分析し、立体化という活動を通して多様な表現方法を用いて作品の理解を広め、宮沢賢治の幻想的な世界を楽しく体感させることを目標とした。



水底の石は新聞紙を丸めよう。

2. 児童の実態と指導の工夫

当時受けもった児童は図画工作科に対する関心が高く、好きな教科では第1位に上がるほどで、熱心に創作活動に取り組んでいた。また、細かい表現を楽しむ児童、装飾的な表現を楽しむ児童、立体的な表現を楽しむ児童など、個性的な面が見られるようになってきていた。そこで、本題材では、地域の芸術家を学習支援ボランティアとして招くことによって、多様な表現を可能にし、個に応じた指導を図ってみた。製作活動においては、以下の3点に工夫を試みた。

①指導と評価の一体化を図る学習カードの工夫

振り返りカードを使い、各自が製作計画を立て、また、デジタルカメラで児童の製作過程を記録することにより、各自の形成的評価と支援を明確にできるようにした。

②評価補助簿の工夫

記号の記入、文書記述を併用し、児童が次時の活動の見通しをもち、意欲を高めることができるようにした。その際、教師自身もデジタルカメラを活用し、見取りを行い、評価に役立てた。

③鑑賞タイムの設置

製作活動の毎時間後半に学び合いによる学習の深め方の工夫として「鑑賞タイム」を設けることにより、自分と友達の違いやよさに気づき、友達と表現した喜びを共有でき、本題材に共感をもってのように工夫した。

3. 子ども自身の発想を重視した展開を

当時勤務していた学校には体育館とは別に旧体育館(旧講堂)があり、その床全面に作品群を広げ、授業以外でも好きな時間に作品作りに取り組めるという利点があった。ここでいくつかの作品を紹介したい。

①光と影を取り入れた「雪わたり」

3人で窓の光を利用し影絵を考え実施。アイデアスケッチをきちんと描き、計画的に製作活動に取り組んでいた。当日は晴天のため、窓からの光を浴びて、きつねが見事に影絵となり映し出された。

②2つの場面の「やまなし」

国語の教科書に出てきた5月と12月の場面を表現。かにをどのようにつくったらよいか迷いがあったが、ペーパークラフトの要領を生かすように支援した(段ボールで製作)。自分より大きいやまなしの世界に入り込み、子どもたちも満足げであ

った。

③「銀河鉄道の夜」と「よだかの星」のコラボ
ステージに暗幕を張り、イルミネーションを利用し、宇宙空間を表現。ステージの空間を走る銀河鉄道には拍手喝采であった。

④ブラックライトを使用した「銀河鉄道の夜」
物置の部屋を改良し、ブラックライトを活用。宮沢賢治独特の幻想的な世界を表現した。

汽車を段ボールで作成し、蛍光ポスターカラーで着色し、風糸でつるす。電気を消し、合図とともにブラックライトを照らすと、そこはもう、物置ではなく、子どもたちが作り上げた宮沢賢治の世界そのものであった。

4. まとめ

今回この題材を取り組んでみて以下のことがわかった。

①共同作業の大切さ

友達との共同作業を認めることにより、他者との関わりをもつことの大切さを感じられた。

②鑑賞タイムの工夫

自分の気づかないことを友達がやっていたら、「あ、これはいいな～」と自分の活動に生かすこともあり、児童の試行錯誤には効果的であった。今後はそのもち方について、交互に友達の作品を見合ったり、努力点を発表したりするなど工夫するとさらによくなるのではないかなと思う。

③評価の工夫

評価補助簿については、今回デジカメ映像が効果的であったが、メモなどの蓄積も行い、評価に客観性と信頼性を高めると同時に子ども一人ひとりの思いとその実現の状況を評価することが大切であるとする。

「学力向上」が叫ばれる昨今、どうしても読み書き計算に偏ってしまいがちであるが、発想や創造力を大切にしたい図画工作の重要性を、そして、知性と感性が融合して初めて学力向上と言えるということをもう一度再考すべきである。

(なかにし のぶひと)



「雪わたり」



「やまなし」



「銀河鉄道の夜とよだかの星」



「ブラックライト銀河鉄道の夜」

「自分らしく時を刻む」

～世界にたったひとつのオリジナル時計制作～

山形県鶴岡市立藤島中学校 阿部 昌子

1. はじめに

「ごまかさず、自分とまっすぐ向き合うこと」…中学生にとっては、さけては通れないことである。美術の授業では2年の後半から、自分をみつめ、本当の自分を見つけようとする制作を多く行っている。様々な経験を通して成長していく様子が作品となって残されていく。まだまだ、誰でもいろいろ思い悩んだり、迷ったりしながら、成長していくわけだが、中学校美術の授業の中での自分探しは、3年のこの題材で終わりになる。



自分の成長を表現した抽象彫刻の模型



自画像

2. 「時」をどうとらえるか？

「時」という目には見えないけれど、常に身につきまとうものの不思議さ、その存在の曖昧さゆえに、生き方に大きく関わる「時」を自分なりにとらえ、自分らしい形や色に表現させたいと考えている。3年生のこの時期に、「自分らしく時を刻んで生きてゆく」ということは、どういうことなのか、この機会にもう一度深く考えさせ、自分らしさを全面に出した時計という形に表現させたい。



3. 考えを聞いて想いを深める！

～プレゼンテーション～

自分の胸の内だけで考えを巡らすのではなく、班やクラス単位でプレゼンテーションを行った。発表のたびに拍手がおこり、作り方についての質問があったり、改善点を話し合ったりする。自分の価値観のみに固執しすぎることなく、プレゼンテーションを聞いた人に想いを伝えてほしい。受け手がどう広げるか、いろんな見方や感性に直面することに価値がある。このプレゼンを大切にしたい。



代表による
クラス
プレゼンテーション

4. 「自分で材料を選ぶ」

～素材・道具との出会い～

自分で立てた計画に従って、美術室に準備した材料の中から自由に選んで制作する。こちらでもできる限りの素材は準備するが、それでも足りない物は、自分で探して購入したり、落ち葉や貝殻を持ってくる生徒もいる。生徒全員分準備する物は、100円均一の時計の針（結構種類がある）、約500円のムーブメントだけである。

その他、美術室に準備してある材料は、ベニヤ板、アクリル板、紙粘土、マイルドクレイ（ホワイト・ブロンズ・セピア）、ダンボール、イラストボード、金属板、コルクボード、発泡スチロール、木材…など。その他各種金具、接着剤、工具などできる限りの物を準備し、生徒の要望に応えられるように考えている。



5. 卒業式で展示！

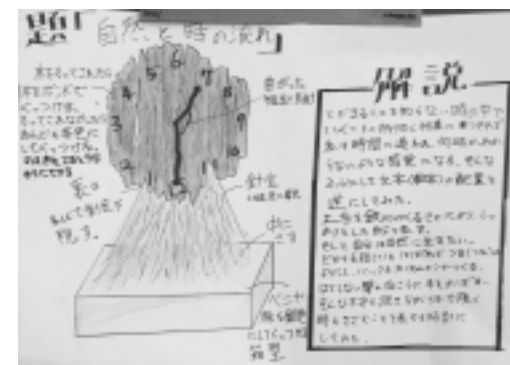
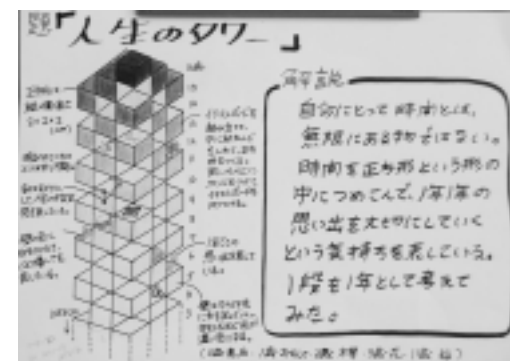
8時間の制作時間で、ほぼ全員が完成し、卒業式の花道に展示する。制作意図や計画がわかるように、プレゼンテーションした時の企画書と一緒に、重ね合わせるように展示し、お世話になった家族に、一歩自立に近づいた姿をみてもらう。



6. おわりに

～生徒のプレゼンテーションより～

- 私にとって時間とは、何かに挑戦するためにあるもので、それをやり遂げるために積み重ねていくものです。今があるので、今までの時間を色のちがう丸で表現しました。また、時間はいつも輝いているイメージなので、明るい色を使いました。
- 自分にとって時間とは、無限にあるものでない。時間を正方形という形の中につめこんで、1年1年の思い出を大切にしていこうという気持ちを表している。一段を1年として考えてみた。
- 時間とは、すべての人に同じだけ与えられているものだけど、時間の感じ方は、一人一人ちがっていて、その一瞬が明るかったり、暗かったりいろいろだと思う。その明と暗を白と黒で表しました。
- 時間とは、一日一日の中にあるものだと思います。今日が終われば明日がある。その明日へ向かって、明日への扉を開けていこう、そして、明日からも自分の時間を大切にしていこうという想いです。（あべ まさこ）



キッズアート2 ~アドパレットでオブジェをつくらう~

滋賀県高島市立安曇川中学校 鈴木 典明

1. はじめに

造形要素を造形活動の基礎・基本と位置づけ、学校の限られた時間と空間の中でポイントを踏まえた授業が創造されつつある。しかし、時間と空間の制限の壁は破ることができず、この問題は永遠の課題として日々取り組まなければならない。そこで、より長い時間、より広がりのある空間を求めて、夏休みに社会教育施設を利用してキッズアート(1998~2001年)が展開されてきた。

2. キッズアートの基本的な考え方

①：子ども本意の造形活動

遊びの中から子ども達の内なる造形性に火をつけ、子ども自ら創造する力を引き出すこと。

②：みること・ふれること・つくること・参加することが一体となった空間

制作しながら人との関わりや他の人の造形活動や作品から受ける創造的なエネルギーの交流も含めた鑑賞空間としても機能し、造形作品やその制作過程、そして造形活動に関わる人との交流を含めた展覧会を創ること。

3. キッズアート2(2005年)

参加者：小学4年生、中学生・高校生(美術部)
サポートスタッフ：高島市美術教育研究会(小・中・高の美術担当教諭)、大学生(滋賀県立大学)

(1)アドパレットづくり

①講話「色の魅力」：京都精華大環境建築研究所 副所長堤幸一氏

◇「色について考えたことがありますか」：山、海、太陽、髪の毛、肌色などは何色かなどの問いかけから始まり、普段考えているものの色について考え、意識をして色を見ることの大切さを知らせた。

◇「色に気持ちは関係あるの」：色から感じる印象やイメージは、共様性といって世界中の人が共通して感じることを知らせ興味づけをした。

◇「あなたの町の色は」：京都、大阪、神戸、などの街から感じられる色のイメージについて考えさせ、安曇川の街の色についてイメージを広げた。

「まず色があって、目にはいってくるだけではなしに、目が自分自身で色を探る。そのとき目が喜ぶ」とゲーテの色彩の感じ方について述べた。

②フィールドワーク

フィールドワークは安曇川駅周辺の市街地と藤樹神社周辺の文化ゾーンの二つのエリアに分け、写真撮影を行った。この活動から「いつもと違う見方で街の風景を見ることができた。」という子どもの声があるなど、日常的なものの見方から造形的なもの見方へと変化したことがわかる。

③色の考察

デジカメで撮った写真データをパソコン画面で並べ替えて、色の考察を行った。色相環の掛け軸を提示し、色相順に並べ替え、どんな色が撮影されたかを考えさせた。色相環の中で足りない色は何かを考え足りない色はほかの場所とする課題として各グループでまとめた。各グループで話し合いの結果をパソコン画面からスクリーンに映して発表させた。バランスよく色をとったグループや色に偏りがあるグループもあり様々であったが、全体に色味のない無彩色が多くなった。

(2)立体オブジェの制作

オブジェ制作用に小学生だけのグループ、中高生混合のグループに再編成した。アドパレット(カラーカード)を貼り付けるための枠として安曇川の伝統文化(扇骨)の材料の竹を使い制作をした。

①エスキース制作

まず、幾何学的な基本図形と竹のオブジェの写真や資料として用意して、各自イメージスケッチを描かせ、筆でエスキースを作った。

②オブジェ制作

グループで話し合っってエスキースを選び決定。オブジェづくりとなる。小学生グループはスタッフ(小学校の先生)と子どもが一緒に制作した。

③合評会

京都女子大の土田教授を迎え、対話形式で作品の評価を行った。各グループから作品のアピールポイントや制作時の苦労した点について発表し、その後全員で意見交流を行った。子どもたちは予想以上に思い思いの意見が出せ、充実した合評会となった。



講評する土田教授と作品

造形ピックアップ

埼玉県美術教育連盟

埼玉県美術教育連盟事務局長 山田 一文



する参加者主体の体験型研修会です。(写真参照)
「授業研究会」先の研修会の成果を受け、授業を実施し、指導と、題材について研究する会です。
3つめは、造形研究大会の開催を5つのブロックのローテーションで行っていることです。これによって各ブロックの研究の活性化を図り、ひいては県全体の美術教育の充実を目指しています。今後は、研究内容の充実を目指すとともに、本会の取り組みがより多くの方々知ってもらえるよう情報の発信に力を入れていく予定です。

(やまだ かずふみ)

埼玉県美術教育連盟は、県内の小中学校の美術教育に関する教職員で組織された、美術教育の振興を図ることを目的とした会です。いつも会合を開く度に、たくさんの方々の参加と応援をいただいているこの会ですが、おかげさまで平成19年度に発足60周年を迎えます。今後も、子どもたちの豊かな成長を願い活動を展開して参りますので、引き続きご理解とご協力をお願いいたします。主な活動は、美術教育に関する調査研究、研究大会や展覧会の開催、関係機関・団体との連絡調整等があります。その運営には、3つの特徴がありますので以下に紹介いたします。

1つは、小中学校が合同で行っていることです。

本会は、小中学校の交流が盛んです。組織の構成から、研修会、研究大会、展覧会等の場面で小中の先生方が協力して活動を展開しています。会としての研究でも小中学校を通じた、子どもたちの学びの系統性や題材の展開を重視しています。

2つめは、毎年2回の造形研究大会を実施していることです。2回の造形研究大会とは、次のような特徴を持った、現場の先生方のための会です。「創造体験研修会」具体的な作品づくりをしながら素材の可能性を追求したり、題材を開発したり